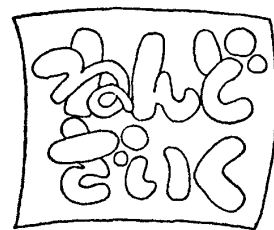


私達の日中交流

うえ
植した
下かのう
協*そう
宋えい
永こん
焜**

このたび、私達に、中国の西安公路学院から名誉教授の授与証書が送られてきた。名誉教授に推挙されたいきさつなどを書くようにとのおすめをいただいたので、私達の日中交流の報告を書いてみたいと思う。

最近、極めて大量に、中国からの賓客や留学生が、日本の各方面にきているので、日中交流は到所で頻繁に行われている。私達の日中学術交流は、昭和55年に中国が大量の学者を世界各国に送り出したときに、西安公路学院の周藍玉講師（当時）が名古屋大学に派遣されてきたことに始まる。

西安公路学院は、日本流に言えば、西安道路大学となるが、中国交通部関係の人材教育を目的とした教員数750名、学生数3800名の大学で、中国の現代化政策の線に沿って、交通・運輸関係の技術者の必要性の増大に対応して内容の充実拡大を行いつつある交通部所属の名門大学である。

周講師が2年間、日本に滞在している間に、名古屋大学の先生方だけでなく、訪問した北海道大学の土質工学分野の先生方にもお世話になると同時に、名古屋大学と縁の深い関東学院大学教授の宋とも中国語で話し合える友人となっていた。

周講師の来日当初は、日本語になれてもらうための勉強が主で、植下の「道路工学」の授業を、日本語の勉強も兼ねて聞いてもらった。その授業は道路の歴史から始まるが、1300～1200年前ごろ、多くの遣唐使一行が中国の長安、今の西安に命がけで旅行をして中国の文化を学び、その留学生達が日本の道路や街作りに貢献した話が出てくる。今日、逆に、日本の道路工学を勉強している西安の大学教官が名古屋に居ることを感慨深く思ったものである。

2年の日本滞在を終えて中国に帰った彼から、暫くして、中国への招待状が来た。一年近い準備・打合せの書簡の往復の後、植下・宋教授団として、昭和60年9月17日から18日間、北京→西安→上海の日中親善学術講演旅行を行った。

この間、北京空港に到着した時から、上海空港を飛び立つまで、周教授はずっと私達の中国生活を世話してくれて、私どもには快適な旅行であったが、各都市でのホテルの確保、飛行機旅行の予約、北京や上海でのタクシーの雇い上げなど、今の中国の供給力不足の中で、受け入れ側の周教授の苦労は大変なものであった。

特に、北京でのホテルは、前々からの受け入れ準備にもかかわらず、われわれが北京空港に夕方6時に着いたときには未決定の状態で、北京空港で晩さんの接待を受けているときに、やっと北京飯店に部屋がとれるという状態で、周教授の胸の中は大変な心配であったと後で打ち明けられた。

中国では、北京水利電力経済管理学院と西安公路学院で、植下が日本における工学的土質分類法、日本における道路工学、宋が日本の土質安定工法、日本の新交通システムなどについて、ビデオ、カラースライド、OHPなどを用いて講演をした（写真1参照）。

なお、西安滞在中に、西安の北約200kmのところにある黄陵（中国伝説上の初代皇帝の黄帝陵がある）を訪問したが、4時間近い黄土高原真ただ中の自動車旅行は誠に印象的であった。このときに採取した黄土の試料から、 $G_s=2.65$, $w_L=39.1\%$, $I_p=15.6$ の粗粒分を含まない粘質



写真—1 西安公路学院の植下・宋特別講義に全国から集まった受講者達との記念撮影

*名古屋大学教授 工学部

**関東学院大学教授 工学部

ねんどざいく

土(CL)という判別試験結果を得ている。

私達が、上記の中国旅行に旅立つ直前に、「西安公路学院の院長を団長、国務院交通部教育局長を副団長とする6名からなる中国交通部大学教育視察団を中国政府の費用で11月ごろ、日本に派遣する予定があるが、名古屋大学の先生方はお会いいただけますか」という植下宛の手紙を周教授から受け取った。

この中国側の要望に対し、植下・宋で日本での対応をいかにすべきか、いろいろと思案をし、日本道路協会、土木学会、日中経済協会などの担当者達とも相談をしたが、日本には中国交通部教育局の大学教育視察団にふさわしい受け入れ組織のないことが分かり、名古屋大学工学部教授としての植下が中国人6名の身元保証人となって外務省に書類提出することとした。

この書類において、中国人6名に関する植下の保証内容は、1) 必要に応じ滞在費および帰国旅費を負担すること、2) 本邦滞在中、日本国法令を遵守させること、3) 要請のあった場合には、本邦における在留状況を関係省庁に遅滞なく報告すること、4) 滞在日程の変更の都度あらかじめ関係省庁へ報告すること、5) 入国目的以外の活動を行わせないようにすること、6) 滞在期間内に出国させることで、中国からの視察団が日本での視察に多大の成果をあげて、無事に中国に帰着し、中国から感謝の書状をいただいた時には、中国人視察団の日本での全責任を担って心配と苦勞が大きかっただけに、私どもの喜びは極めて大きいものであった。

中国交通部大学教育視察団(写真-2参照、3名は土質工学専門家、2名は橋梁工学専門家であった)の東京での宿舎は、土質工学会に近いホテルを利用したので、来日早々、土質工学会で、副会長出席のもとに、歓迎昼食会を開いていただき、視察団が関心をもつ土質工学会の出版物を贈呈していただくなど、当学会にも大変お世話になった。

中国人6名の日本での旅行については、当初、N旅行会社外人旅行センターにも相談をし、旅行会社がすべてを世話する場合の全費用(ガイドつき3週間)は約600万円であるという見積書を中国側にあらかじめ送りはしたが、日



写真-2 新東京国際空港に到着した中国交通部大学教育視察団(6名)を出迎えての記念撮影(左より、西安公路学院長李斌教授(団長)、同副院長張登良教授、国務院交通部教育局長晏賢良教授(副団長)、長沙交通学院廖紹豪副教授、重慶交通学院顧安邦副教授、宋、西安公路学院周藍玉副教授(通訳)、植下)

本の旅行会社にまかせる旅行は今の中国政府にはなじみ得ないと判断し、中国語のできる宋が旅行会社(添乗員)の役割をつとめ、中国側の経済的負担の軽減に可能な限りの努力をした。

中国からの視察団は、当初、中国側の要望で北海道大学視察も含めた3週間で計画されていたが、中国側の外貨事情などの理由で、実施直前に2週間に縮小変更され、北海道大学や建設省土木研究所などの訪問を中止するなど、日本でのスケジュールに急な変更が生じて迷惑をかけた依頼先がいくつかあった。外務省には「滞在日程表の変更届」を提出し、昭和60年11月17日から15日間、筆者らは一緒に、または交替して中国視察団に同行したが、この間、毎日平均20名以上、合計300名以上の日本の方々のお世話になって、内容の充実した日本での視察旅行を成功の中に終了することができた。

今回、私どもに、はからずも名誉教授の授与証書が届けられたが、日本の多くの方々の御協力をいただきながら、私どもに課せられた日中交流の責任を果たし得たことを思い起こし、多くの方々の御好意に改めて感謝している次第である。

(原稿受理 1987.3.10)